

「何かしたい」学生がボランティア決起集会を開催

現在、東京大学教養学部学生自治会で義援金や援助物品集め、被災地への派遣のためにボランティアの協力を呼びかけたところ、200人以上の東大生がボランティアスタッフに登録しました。今回は「ボランティアスタッフによる決起集会」に民医連の医療支援にいった職員がよばれ現地報告を行いました。以下東京健生病院医学生担当の鷺見（スミ）さんからのレポートです。

4月17日に東大教養学部自治会主催の地震ボランティア決起集会に参加しました。

民医連から現地に行った経験を立川相互病院の山城看護師と東京健生病院の鷺見が報告しました。また千葉県浦安で行ったボランティアの様子を東大生が報告しており「自分でも何かしたい」「何ができるのか」という思いがひひひと伝わってくる決起集会でした。

報告した感想としては東大生の質問は本質をつくものが多く「地震支援のゴールはあるのか」などこちらも考えさせられるものでした。学生が考え、行動していることに励まされながら東京でも支援活動を頑張っていきたいです。（写真は講演する立川相互病院の山城さん）



仙台市若林地区の被害状況 千坂事務局長の現地レポート



行く手を阻む路上の家屋

津波で大きな被害を受けた若林地区は、海岸線に沿って高く盛り上げた土手の上を北上する東部道路が走っており、海側と陸側を2つに隔てている。

民医連の若林クリニックは陸側にあったため、津波の被害は軽微だった。海側は捜索や道路の回復工事のため大震災以後これまで立入り禁止地域も多かったが、私たちの到着した日（4/17）からは海岸近くまで開通していた。

東部道路の下を潜り抜け海岸に出ると、風景が一変した。

巨大な松の木が田んぼの中になぎ倒されて運ばれてきている。海に向かってぎっしり生えそろうているはずの防風林は、歯の抜けた状態で隙間から海が見える。どの家も1

階部分は破壊されておりとても人が住める状態に戻せそうにない。道の真ん中に倒壊した家が居座っており、う回路が作られていた。押し流されて潰れた車も数百台あり田んぼの中に散乱したり、あちこちに寄せ集められていた。

「どうやってこれから片付けるのだろう・・・」と私が呟くと、「1カ月間片付け続けて今の状態ですよ。4週間前は道路上に散乱した車や家のがれきで動きがとれなかった。車で通れるようになったただけ前進です。」と隣で運転していた東京民医連の杉浦さんに言われ返事に詰まった。復興までにはとてつもなく時間がかかる。もっと集中した対策が必要だと感じた。